

縄文時代前期における貝塚形成の意義

洲 壽 和 宏*

ーはじめにー

本稿は、歴史教育における原始・古代史学習の中で、実際の地域に存在する考古学的資料を用いて、縄文時代の生産や地域の発展について学習するプロセスの一例を提示しようとするものである。その題材として、今回は縄文時代の貝塚を取り上げた。それは以下の理由による。

「縄文時代」と聞いて、人々が思い浮かべるイメージは多種多様と思われるが、中でも「貝塚」を思い起こす人は多いであろう。大多数の人々が縄文時代について知識を得るのは、学校教育の場であると考えられるが、そこで使用される歴史教科書の縄文時代の項では、必ず貝塚が取り上げられている。試みに現行（平成2年度現在）の高等学校日本史教科書について調べたところ、「貝塚」について何ら記載のない教科書は皆無であった⁽¹⁾。

貝塚は縄文時代の食料・生業活動・自然環境の復原に際し、極めて有効な資料を我々に与えてくれる。日本史上における前後の時代との関わりや、世界史的な視野から比較する時、縄文時代は生産基盤、すなわち食料獲得経済の段階であることに大きな時代的特徴を見出し得ること⁽²⁾を想起すると、各時代構造や歴史的発展過程の把握をねらいとする高校日本史教育⁽³⁾でも、貝塚は極めて具体的かつ詳細な情報を子ども達に提供し、歴史を理解する糸口を与えてくれるはずである⁽⁴⁾。

しかし、実際は貝塚について、教科書ではこれ以上深化した記述はなく、まして貝塚の資料を縄文人の生産基盤に的確に位置付けようとした記述はほとんどない。歴史教育の場における実践例を検討しても、こうした事例に出会うことができない。

これは、従来の考古学界における貝塚の扱われ方が、歴史教育にそのまま反映している為ではないだろうか。貝塚は常に、土器編年・原始集落論・墓制・縄文人骨研究等の為の手段に過ぎず、貝塚そのものの自然遺物による当時の食料・生業活動復原の試みが、自然科学分野の補助を得て具体的成果を挙げ始めたのは、まだ近年であると言ってよい。こうした研究の中で、貝塚を残した人間集団の季節的生業の在り方まで復原し得た、東京都伊皿子貝塚⁽⁵⁾・宮城県里浜貝塚⁽⁶⁾での業績は、研究史上画期的な事例であり、今後このような研究成果が歴史教育の場に導入されることは必至であろう。

反面、貝塚に残存する資料を過大評価しかねないというデメリットもある⁽⁷⁾。特に授業では、具体的な資料（貝殻・獣魚骨など）を子どもに提示できるだけに、縄文時代は「狩猟・漁撈を中心として」生活を営んだという、極めて一面的な理解に導きやすい。故に、各地域の生産・社会の発展に際し縄文時代の貝塚がどのように機能したのか、またそれは全体史の中でどのように位置付けられるのか、見極めておく必要もあると思う。

* 愛知県立一宮西高等学校

以上の理由により、縄文時代の貝塚について、第一に地域の生産基盤における貝塚形成の意味を明らかにし、さらに貝塚から読み取れる地域の諸集団の生活・社会の発展・推移を復原することを主な課題として、以下の論を進めていきたい。

1. 「古奥東京湾」沿岸地域の縄文時代貝塚

(1) 当該地域における貝塚研究

「貝塚」は、縄文時代を代表する遺跡であり、その数は全国で3千ヶ所を超えるという。関東地方は日本有数の貝塚地帯であり、全国の貝塚の約6割が集中する⁽⁸⁾。特に、利根川下流域の広大な霞ヶ浦を擁する地域、江戸川・荒川谷の沿岸地域、そして、東京湾沿岸に数多くの貝塚が分布している。これは、東京湾や霞ヶ浦に遠浅の海浜が発達し、関東平野を流れる多くの河川による陸水の供給も豊かで、貝類の棲息に適した環境が用意されたからであろう。無論、これらの地域で貝塚が一樣に形成された訳ではない。貝塚の出現時期や、規模・形状などの時期的な変遷を調べると、それぞれの地域差が明確に現れてくる。

縄文時代の早期初頭、およそ8000年から9000年前に、関東地方の海岸部で貝塚が形成され始める。縄文人たちが海へ、生活圏を広げ始めたのである。そして、貝塚形成が特に盛んであった縄文中期から後期にかけて、東京湾沿岸には加曾利貝塚・堀ノ内貝塚をはじめとして、日本を代表する大規模な馬蹄形（環状）貝塚が数多く形成された。

しかし、早期から前期にかけて、内陸の江戸川・荒川谷の沿岸台地上にも多くの貝塚が形成されていた。足尾銅山鉍毒事件の被災地として有名な渡良瀬川遊水池の西岸、栃木県下都賀郡藤岡町には、内陸の最奥部に位置する貝塚として知られる、篠山（藤岡）貝塚がある。この貝塚は汽水域を好むヤマトシジミを中心に、若干の内湾性貝種の貝殻で構成されており、貝塚形成当時には、この付近にまで海水の影響があったことが伺われる。

内陸部にまで貝塚が形成された背景には、一般に「縄文海進」として知られている、海水準の上昇現象が想定される。縄文海進は、約6000年前の縄文時代前期がピークであった。当時は館林台地のすぐ東南部にまで海水が侵入し、「古奥東京湾」⁽⁹⁾と呼ばれる内湾を形成したと言われている。関東平野に発達したローム台地の、樹枝状に発達した谷には、湾の侵入によって入江が非常に発達し、ここが貝類の好漁場となったのである。

さて、こうした海水準の変動について、貝塚分布の時期的変遷を用いて捉えようとする試みが、東木龍七⁽¹⁰⁾や江坂輝彌⁽¹¹⁾らにより戦前から論じられてきた。しかし、この地域の貝塚そのものについて、その生成の意義を当時の環境や生活文化との関連から歴史的に位置付けようとする試みは、意外にもほとんど行われていない。この意味で、当時の生業や自然環境との関係から、縄文時代前期の貝塚形成の意義について論究した、近年の鈴木素行⁽¹²⁾、金山喜昭⁽¹³⁾、小杉正人ほか⁽¹⁴⁾の業績は、それぞれ出色である。

以下では、これらの研究を踏まえて、「古奥東京湾」沿岸地域の貝塚を資料として、貝塚形成上の特色を把握する所から始め、当時の生活における貝塚の位置付けについて追求していくことにする。

(2) 分析に用いた資料

この地域で最も貝塚形成が盛んであったのは、縄文土器型式による編年でいうところの関山式にかけての時期⁽¹⁵⁾である。分析の第一歩として、古奥東京湾沿岸にあたる、栃木・埼玉・茨城・千葉の4県下で発掘調査の行われた貝塚を伴う遺跡から、調査結果の良好な貝層（＝貝塚に於ける貝殻を中心とした堆積層）を資料として抽出・集成した。その結果、前期関山式期で8遺跡86例、黒浜式期で17遺跡112例、2つの時期に重複するものを含め、合計24遺跡198例の貝層を抽出することができた（第1表）。

〔関山式期（約6000B. P）貝塚〕							
（遺跡名）	（貝塚の種類）	（貝塚数）	（住居数）				
1. 篠山貝塚	住居址	2	2	3. 下根遺跡	住居址	2	3
	土坑	1		4. 飯塚貝塚	住居址	9	17
2. 風早遺跡	住居址	3	7		土坑	1	
3. 打越遺跡	住居址	26	50以上	5. 木津内貝塚	住居址	3	3
4. 御庵遺跡	住居址	8	10	6. 米島貝塚	住居址	6	11
5. 南通り遺跡	住居址	3	3	7. 犬塚遺跡	住居址	2	11
6. 殿山遺跡	住居址	4	4		面状	1	
7. 関山貝塚	住居址	1	1	8. 尾ヶ崎遺跡	住居址	7	8
8. 幸田貝塚	住居址	37	126		住居縁辺	1	
	面状	1		9. 槇の内遺跡	住居址	10	19
〔黒浜式期（約5500B. P）貝塚〕					土坑	1	
1. 野渡貝塚	住居址	2	3	10. 花前Ⅰ遺跡	住居址	7	12
2. 原町西貝塚	住居址	3	5	11. 柴崎遺跡	住居址	24	36
	土坑	9	3以上	12. 殿平賀向山	住居址	3	5
	土坑縁辺	1		13. 殿山遺跡	住居址	5	5
				14. 宿上貝塚	住居址	3	3
				15. 掛貝塚	住居址	1	1
				16. 山崎貝塚	住居址	2	4
				17. 大谷場貝塚	住居址	6	6
					土坑	2	
					面状	1	

〔第1表 古奥東京湾沿岸地域の縄文時代の前期貝塚集成表〕

(3) 貝塚の分類と特徴

貝層資料を分析するためには、貝層の状態から幾つかの類型に分類することが基礎的な作業となる。しかし、貝塚を分類する為の基準が、明確に設定されている訳ではない。貝塚は、当時の人々によって採集され利用された貝殻を中心とした食料残滓が、ある場所に集められ、廃棄された遺跡である。だから、貝塚の残された場所や廃棄された方法には、人々の生活の様相や、残滓を集め廃棄するという行為に画された人々の意図や願いが必ず反映されているはずである。その

意味で、貝塚を単なる「ゴミ捨て場」として把握するのは正しい理解と言えない。そうした先入観を排除し、貝塚の持つ情報を正確により多く引き出す為には、貝類を中心とした残滓の廃棄状態を客観的に把握する必要がある。

このような観点から、試論として貝塚の分類基準を示したのは、前田潮である。⁽¹⁶⁾。前田の分類基準により、抽出した貝層資料を分類すると、

- a. 集落内で、遺溝（竪穴住居址）に関連して形成された貝層……196 例
- b. 集落内で、遺溝とは関連なく、面状に広がる貝層……………2 例

の2種類の貝塚の存在を指摘することができた。これにより、この地域に形成された貝塚について、以下の2点を全体に共通する特徴として指摘することが可能になる。

① 「全ての貝層が、集落遺跡内に形成されていること。」

…貝塚のほとんどが、洪積台地上に立地する数基～数十基、なかには100 基以上の竪穴住居址を持つ集落遺跡内に形成されている。集落域外の貝塚例として、同じ前期では千葉市の宝導寺台貝塚が、後期の例として東京都港区伊皿子貝塚の例が知られているが、今回分析対象となった地域の発掘例では皆無であった。

集落以外の場所から貝塚が発見されないという事実は、「この種の貝塚に廃棄された貝類が集落で利用された貝類の総量である」ことを、現時点では示すことになる。

② 「ほとんどの貝層が、住居址・土坑など遺溝に関連して形成されており、特に住居址内貝層が非常に多いこと。」

…縄文時代前期の貝塚は、地点貝塚・点在貝塚と呼ばれる小規模なものが多く、各々の貝層下に竪穴住居址・土坑などの遺溝が存在する例が多いことが知られている。今回集成した資料でもそれを裏付ける結果となった。

ただし、集落の平坦面に面状に形成された比較的大規模な貝層が、わずか2例ながら存在している（幸田貝塚・犬塚遺跡）。この種の貝塚についても検討が必要である。

上の2点の特徴をみると、若干の例外はあるが、古奥東京湾沿岸は縄文時代前期を中心として、外見上極めて似通った特徴を持つ多くの貝塚が形成された一まとまりの地域だと言うことができそうである。この古奥東京湾沿岸に集落を営み、貝塚を残した幾つかの集団は、沿岸の環境に適応し、似通った生活を組み立てていったのであろう。

さて、以上で指摘した貝塚の存在形態に見られる特徴が、どのような意味を持つのであろうか。節を改め、追求していくことにしよう。

2. 貝塚の形態と生業

縄文人の集落に残された貝塚から、我々は通常の2種類の情報を引き出すことができる。一つは「食料資源・生業活動の様相」、もう一つは「信仰・精神的営み」である。

では、縄文時代前期の古奥東京湾沿岸の貝塚から、どの様な情報が読み取れるのであろうか。今回の調査では、「信仰・精神的営み」の痕跡が残る資料は、分析に値する程収集することができなかった⁽¹⁷⁾。このため、今後の資料の増加を期待することにして、今回は、集落における「生業活動と貝塚の関わり」を中心に分析を試みた。

最初に、前項で指摘された貝塚形態の差異に視点を当てて、分析を進めてみよう。

研究史を繙くと、貝塚の形態については、田澤金悟⁽¹⁸⁾や酒詰伸男⁽¹⁹⁾らによって分類が行われているが、生産基盤の面から貝塚形態の差異に大きな意味を見出したのは、後藤和民氏である⁽²⁰⁾。後藤は関東地方の貝塚を集成し、その存在形態から「点在（点列）貝塚」と馬蹄形（環状）貝塚に分類した。そして、両者の時期的・地域的消長を検討し、前者は「集落の日常的貝類消費の所産」として形成され、後者は「専業者集団による交易用干し貝生産の場」である可能性を示し、社会経済史的な立場から所論を展開した。

後藤の「点在（点列）貝塚」という概念は、彼の定義では、住居址内貝塚、斜面貝塚など、小規模な貝塚すべてを包括している。この見解に従えば、今回の調査で大勢を占めた「集落内で住居址等、何らかの遺溝と関連して形成された貝層」群（以後、「住居址内貝層」と呼ぶ）は、「集落での貝類の採取・消費を中心とする、日常的な生業活動の所産」として形成されたものとして一括される。

しかし、調査対象となった貝塚には、堅穴住居や土坑以外に、貝層が形成される場合があった。関根孝夫⁽²¹⁾は、住居址内貝層や他種の貝層を、形成上の意義に相違があるとして3類型に分類した。彼は「面状に広がる貝層（関根のA類型）」を、住居の廃棄儀礼などに関係しない一般の貝類利用の所産と位置付けたが、この種の貝層が松戸市幸田貝塚や埼玉県犬塚遺跡で検出された。

両者の規模を比較したとき、貧弱な「住居址内貝層」と、数～十数メートルに及ぶ「面状貝層」の差は歴然としている。「面状貝層」を有する集落が、貝類採取など漁撈活動に重きを置いたのは明らかである。現に犬塚遺跡からは、多量の魚骨が貝層中から検出されている。他に比較する資料に乏しいため、明確な結論は避けなければならないが、こうした集落は漁撈活動の拠点集落とみられないだろうか。

「面状貝層」の存在は、「住居址内貝層」の意味についても疑念を抱かせる。「日常的な生業活動の所産」とはいえ、貝塚に残された食料は集落の生産基盤の中でどれほどの比重を占めていたのだろうか。さらに分析を進めなければならない。

3. 形成過程からみた貝塚の意味

現時点で我々は、貝塚の位置・堆積状態など、視覚的に得られる表面的な情報を論じたのみである。しかし、貝塚は生成当初から現在の形態であった訳ではなく、時間を経て成層したものであるから、一概に形態のみを論じても無意味である。関根孝夫が指摘したように、貝塚が形成されていく過程を把握して、初めてその貝塚の本質を理解することができる。ここでは、理化学的な分析結果も加味し、貝塚の形成過程について吟味しながら、集落における貝塚形成の意味を考えることにする。

(1) 貝塚産貝類の採取季節推定と貝層の堆積過程

もし、貝塚に廃棄された貝が、一年のいつ頃採取されたかを知ることができれば、生業の季節性や、貝塚の形成に要した期間について、具体的な知見を得ることが可能になる。この貝塚産貝類の採取季節推定法は、日本では小池裕子によって開発された⁽²²⁾。小池氏によれば貝層を構成

する貝類の採取季節推定結果をもとに、「貝類採取活動の季節性」の把握、さらに貝層堆積に要した期間」の推定が可能であるという^(2,3)。

以下で、小池氏の分析結果を利用し、形成過程から推定される貝塚形成上の意義について、主に生業面から考察しよう。分析に使用された遺跡と貝層は、次のとおりである。

○栃木県下都賀郡藤岡町篠山貝塚 第1号住居址内貝層

○千葉県松戸市幸田貝塚 405・407・413 住居址内貝層 (以上、関山式期貝塚)

○茨城県古河市原町西貝塚 1号住居址内貝層・第1a号pit 外縁部貝層・第4・5・12・13・14号pit 内貝層

○千葉県野田市槇の内遺跡・IV-1・IV-2・IV-7・IV-8・IV-11・IV-12・IV-13住居址内貝層

○千葉県松戸市殿平賀向山遺跡・第2・第3号住居址内貝層 (以上、黒浜式期貝塚)

各貝塚の分析結果をグラフ化したのが、第1図である。この結果についてまとめると、次のように言うことができる。

① a) 1年のある季節に採取された貝が集中する貝層と、

b) 季節ごとに量的な差異はあるものの、幾つかの季節にまたがったり、ほぼ周年にわたって採取された貝により、形成された貝層例が存在する。

② b)のように、季節にまたがる貝層が見られても、同じ季節層が再出現する例はすくなく、存在しても量的に極めて小さなものである(幸田405号貝層など)。

③ 分析資料では、貝層の間に、堆積の中断を示す土層や混土貝層等は観察されず、比較的短い期間で貝層が形成されたとみられる。

以上の状況から、調査対象となった住居址(土坑)内貝層の大部分は、1年未満の堆積期間で形成されたと推定されている。

(2) 住居址内貝層の形成過程と生業活動における貝類利用の意義

季節推定の結果は、住居址内貝層のほとんどが1年未満の短期間で形成されたことをしめしている。この結果の意味を考察してみよう。

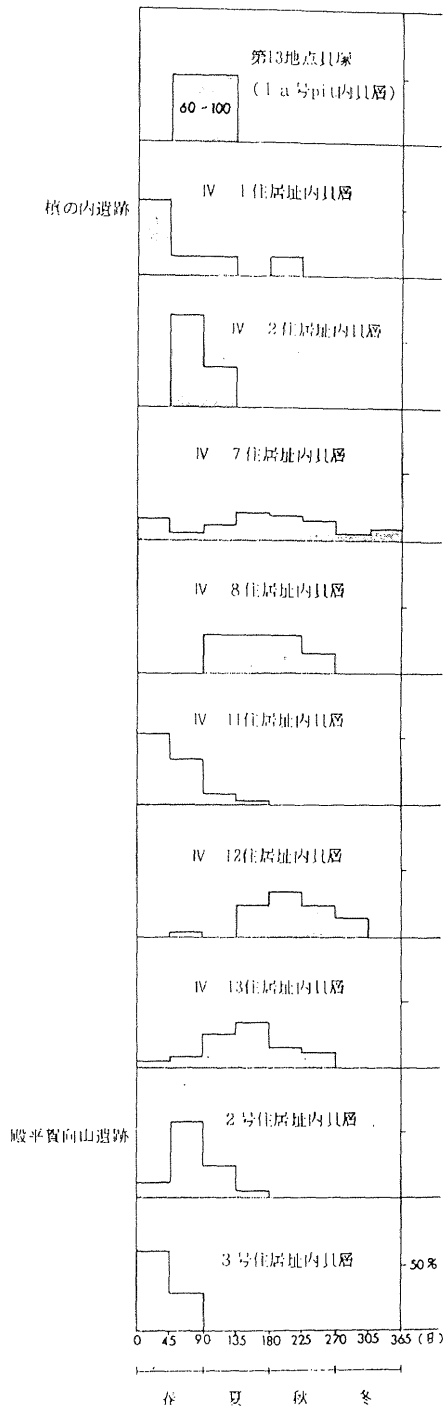
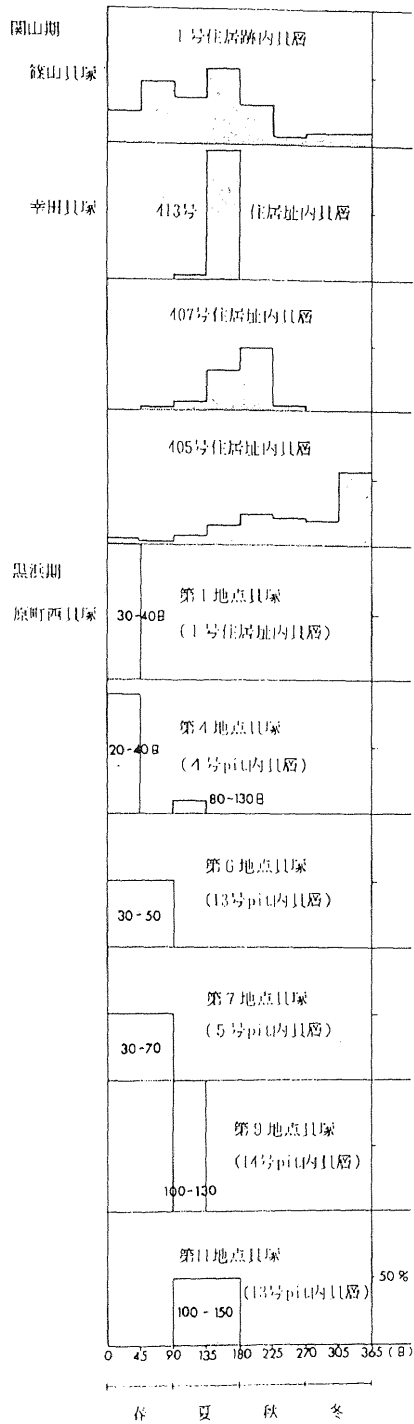
一つの集落遺跡に、複数の貝塚(貝層)が存在する場合、その貝層の形成のされ方は、

(a)「個々の貝層が、全く異なった年次に形成される場合」

(b)「集落の貝層すべてが、同一年次に形成されるか、または幾つかの貝層がまとまって同一年次に形成される場合」

のいずれかの場合に属すると想定できる。

(a)の場合を仮定してみよう。今回の分析例では、同一遺跡内で個々の貝層が示す採取季節が、一定しない例(槇の内遺跡の例など)が多い。この場合、各年の貝の採取がそれぞれ異なった季節に行われたことになる。



第1図 縄文時代前期の各貝塚における貝類の採取季節

(上記左上より、小池裕子, 1981. 1979. 1985. 1987. 1987. に従って作成)

赤澤威⁽²⁴⁾によれば、縄文時代のように自然物の収奪を基本的な生業形態とする場合、周囲の自然環境についての豊富かつ詳細な知識に基づく、極めて計画的な生業の季節的配分が行われるという。日本のように中緯度環境に位置し、四季の推移が顕著な土地では、この傾向はなおさら強化される。この前提によれば、ある集落で貝の採取が毎年異なる季節に行われる場合、その集落では貝類採取活動が一定の季節的スケジュールの中に組み込まれておらず、生産基盤の中では流動的な地位にあることを示している。

これに対して、(b)では極端な場合、集落内の貝層すべてが同じ年に形成されたことも考えられる。この場合、逆説的に、集落の存続期間内に「貝塚が形成されない期間＝貝類が食料として利用されない期間」が存在することが想定される。

この場合、貝類を利用しない期間においても、他種食料を調達する生業活動を中心に生活が維持されており、貝類は何らかの場合に一時的に利用された食料資源であると考えられる。集落の存続期間が長期間にわたった場合、この現象は(a)の場合でも起こり得る。

(a)、(b)いずれの場合でも、貝類は常に利用された食料ではないという結論に達する。先に縄文前期貝塚における貝類利用の意義について考察した鈴木素行⁽²⁵⁾は、貝類は恒常的に利用される他の食料資源が不足した場合に、その不足分を補うために利用される「慌救食料」として位置付けている。

少数の遺跡の分析結果から、当時の貝塚形成の意義について述べるのはいささか乱暴だが、第1節で指摘したように、この地域の貝塚の形成状況が極めて似通っていたことを想起すると、この結論も説得力を持つのではないか。

もちろん、貝類が補助的な食料として利用されたものであったとしても、それは逆に、当時の人間にとって、貝類が他の食料資源が不足した場合でも利用可能な安定した食料資源として認識されていたことを示すのであり、その意味での貝類の需要を軽視すべきではない。赤澤も指摘するように、自然物の収奪を中心とする生業形態をとる生活においては「資源の季節的な集中利用」に加えて、「食料資源の多様化」も食料資源の枯渇を乗り切るための重要な戦略となっていたからである。このような一見矛盾する生業形態が効率よく組み合わせられ、縄文的な生活形態が、数千年にわたって存続し得たと考えられる。また、鈴木は貝類の需要についても、幾つかのレベルがあると指摘している。この点については集落経営・維持と深い関係があるので、次節で述べることにしよう。

4. 縄文時代前期の集落と貝塚形成

(1)集落の生業活動と貝塚

前節の貝層形成仮定の分析により、貝類が食料基盤の中で常時利用されることのない、補助的な食料であったことが推定された。これを集落経営と関連させて考えてみよう。

黒浜期に、「貝塚を伴う集落遺跡群」に近接して「貝塚を伴わない集落遺跡群」が存在する例が指摘されている⁽²⁶⁾。こうした貝塚を伴わない集落遺跡の存在は、「縄文時代前期の集落は、海岸地域に立地しながらも、基本的に貝類という食料資源に依存せずに年間を通して生活できる他の食料資源と生業形態を有していた。」ことを示すという。

このように、集落の存続期間中に貝層形成の行われない時期が存在したり、同時期に貝塚を伴わない集落が近接して併存することは、貝類が食料として補助的な地位にあったことを裏付けている。この現象を、黒浜期の他の遺跡にまで投影して考えるのはいささか飛躍があるが、黒浜期に見られる貝層規模の縮小、貧弱化を説明する重要な根拠となろう。

黒浜期集落の場合、貝類は、何らかの要因で恒常的に利用される食料が不足した場合にその不足分を補い、危機を乗り切るために利用されたと考えるのが自然である。鈴木素行が指摘するように、慌救食糧という位置付けが妥当である。

しかし、それ以前の関山期にみられた打越遺跡・幸田貝塚など、大規模な拠点集落に伴う貝塚については、「一時的な」食料事情の悪化を補うための需要という点だけでは説明がつかない。集落の発展に伴い、貝層の形成も活発化しているからである。

鈴木素行は、打越・幸田の集落の動態と貝塚形成について、次のように分析する⁽²⁷⁾。

① 打越遺跡 下吉井期(1/7)→花積下層期(5/27)→関山期(26/47)→黒浜期(1/2)

② 幸田貝塚 花積下層期(4/17)→関山期(37/75) [(貝層の数/住居址数)]

両遺跡とも、住居址数の増加＝消費人工の肥大化に伴い、貝類採取量が増大する傾向がみられる。特に、集落形成の絶頂期にある関山期には、貝塚数が飛躍的に増大する。鈴木はこの現象について、膨張した消費人口を基本的な生業形態による生産量で賄うことが困難となり、貝類への依存度を高めた結果と見ている。すなわち、集落人口の増加と資源供給との矛盾を、貝類という比較的安定した食料資源によって補充したのである。

このように、食料としての貝類の需要から、縄文時代前期の貝塚形成について考察すると、関山期の打越遺跡・幸田遺跡に代表される拠点的大集落と、黒浜期の集落とでは、貝類利用の意味に違いがあることが想定できるのである。

(2) 貝塚と前期集落の動態

これまで、古奥東京湾沿岸地域の貝塚形成の意義について、主に生業面から分析してきた。以上の分析結果を、関山期から黒浜期にかけての集落経営と併せて考察する。これにより、当時の貝塚形成の意義を、総合的に位置付けることが可能になるであろう。

関山期は、打越・幸田などの環状構造を持つ大集落がピークを迎える時期である。特に打越遺跡は、縄文海進が最高潮に達しつつある早期末から、集落・貝塚の形成が始まっている。これらの集落では、集落の大型化とともに貝類採取や狩猟・漁撈への依存度が高まっていく。そして、関山期を過ぎると急速に集落は縮小する。

他の集落でも、関山期を境に集落経営が途絶する傾向がみられる。このように、関山期には、早期末以来の古奥東京湾周辺の資源に依存した生活形態が最高潮に達したものの、関山期の終末と共にこうした生活形態が終末を迎えたと考えられる⁽²⁸⁾。原因として、当時の生産基盤が基本的に自然物の収奪に依存するため、集落の大規模化、すなわち集落の人口増加が、食料資源の不足という自己矛盾を発生させたことが想定される。幸田貝塚・打越遺跡における貝類・狩猟動物への依存度の強化が、この状況を端的に物語っている。

これに対して、続く黒浜期は、新たな生活形態が模索され始めた時期といえるのではなからう

か。集落は分散・小規模化する傾向がみられる。これは、食料資源への過度の集中を回避する適応戦略とも考えられる。また、集落における生業も、より安定度の高い植物採集に中心が置かれるとみられる。貝塚は形成され続けるものの、その規模は小さく、一集落における数も少なくなる。貝類は、比較的手近⁽²⁹⁾にあり、環境が悪化しない限り安定して利用可能な食料資源とは認識されつつも、もはや非常時の補助的食料か、あるいは、縄文人の嗜好を満たすためだけに利用されたのであろう。漁撈は、少数の漁撈集落とみられる遺跡（埼玉県犬塚遺跡などがこれに相当する）のみで盛んに行われていた。

黒浜期には、内陸の埼玉・群馬・東京西南部などで、森林の植物資源を主な生業対象とする集落遺跡が急速に増加・発展する⁽³⁰⁾。沿岸部での生活、すなわち古奥東京湾の資源を積極的に利用しつつ発展した生活が衰退していくのと対照的である。これは、当時古奥東京湾が後退を始めていたこととも関係している。海退の影響が少ない湾口部の東京湾東岸域（千葉県下など）では、黒浜期以降同様な集落の小規模・散村化傾向がみられるにも関わらず、貝塚の形成は引き続き行われ、やがて中期以降に大規模な馬蹄形（環状）貝塚形成と、本格的な内湾性漁業が行われる漁業地域として発展を遂げていくのである。

まとめー歴史教材としての「貝塚」の利用についてー

最後に貝塚を離れ、歴史教育における考古資料の利用について簡単にまとめてみよう。

考古学的資料を利用した歴史教育の在り方については、真摯な検討が重ねられてきた。今回、教育と考古学の接点を求め研究を進めている西川宏の見解⁽³¹⁾、安井俊夫⁽³²⁾、小森ケン子⁽³³⁾、鹿田雄三⁽³⁴⁾らの授業実践例を検討し、考古資料を利用した原始・古代史学習を有効なものとするために、以下の3点が重要な課題として指摘できると考えた。

- (1)「地域に根ざし、生徒の身近にある教材であること。」
- (2)「地域史として、時代構成の中心軸となる事象が存在すること。」
- (3)「地域の考古学・歴史学の研究成果が豊富な素材であること。」

各々についての具体的な説明は省くが、考古資料は「地域の歴史」における取り扱いが必要なことを強調しておく。

本稿の冒頭で指摘したように、縄文時代の時代的特徴を理解するには、その生産基盤の評価が必要である。縄文時代は食料獲得経済の段階にあり、自然環境との密接な関連をとらえることも重要な課題である。当時の生産活動の復原を主軸に置き、縄文時代の人々が、地域の自然環境の中でどのように生活を営み、社会を発展させていったかを理解しようとする時、地域史としての取り扱いが可能となるであろう。

縄文時代の生産活動を主軸に地域史を構成する場合、最適な資料は貝塚である。本稿では、甚だ一面的ではあるが、貝塚を利用した生活史の復原の一例を提示し得たと思う。最後に全体史とのつながりについて所見を述べ、本稿の結びとしよう。

本稿全体を通して捉えてきたように、縄文文化は地域の自然環境と密接に結びついて展開する。今回、題材とした古奥東京湾沿岸に貝塚を残した人々の生活も、一地方文化に過ぎない。列島全体の縄文文化に目を向ければ、各地域ごとに特徴ある文化が独自の発展・衰退の過程をたどる。そ

の意味で、縄文時代とは、縄文文化という大レベルの下に、各地域文化という下位レベルが存在するのでなく、これら地域文化に発展段階上の共通点があるだけとみるべきかもしれない。

一つの授業展開例として、今回貝塚の資料を利用して行った地域史の復原を素材に、他地域の生活との比較から、縄文時代の時代的特徴について読み取らせる方法等が考えられる。今後共、蓄積される考古資料が、歴史教育の場で効果的に利用できるように、教育・考古学など多くの立場から検討されるべきであろう。

〔 注 〕

- (1) 現行（平成2年度現在）の高等学校日本史教科書のうち、7社15種の教科書について、索引を使って調査した。（紙数の都合で、出版社・書名は省略する。）
- (2) 縄文時代は、年代的には世界史上の「新石器文化」に属し、定住的生活・磨製石器・土器という共通の文化要素を所有しながら、その生活を支えたのが、新石器文化に共通する農耕・牧畜など食料生産経済ではなく、植物採取・狩猟・漁撈など食料獲得経済の段階にあったことに、時代的特徴を見出すことができる。（この見解は、山内清男、1932・33、「日本遠古之文化」：『ドルメン』1巻4号～2巻2号、で成立した。）
- (3) 藤井千之介、1985、『歴史意識の理論的・実証的研究』：風間書房 p.458など
- (4) 無論、この点については、考古学的資料の有効利用についても考慮されねばならない。（この点に関しては、西川宏、1986、「学校教育と考古学」：『岩波講座 日本考古学 第7巻』に特に詳しい。）
- (5) 岡村道雄、1984、「里浜貝塚西畑地帯の貝塚を残した集団とその季節的な生活」：『考古学ジャーナル』 No.231など
- (6) 港区教育委員会、1981、『伊皿子貝塚遺跡』
- (7) 縄文時代の食料残滓が唯一良好な状況で残存するのが貝塚である。このため貝殻・獣魚骨に目を奪われ、残りにくい植物遺存体を軽視しかねない。しかし、当時の生活ではむしろ植物質食料に比重が置かれていたと考えられている。（近年、低湿地遺跡などから、植物遺体の出土例も目立ってきている。）
- (8) 酒詰仲男、1959、『日本貝塚地名表』：土曜会
- (9) 縄文海進によって形成された内湾には、「古東京湾」「奥東京湾」等の呼称がある。今回は、典拠とした小杉他の論文（小杉正人・金山喜昭・張替いづみ・樋泉岳二・小池裕子、1989、「古奥東京湾周辺における縄文時代黒浜期の貝塚形成と古環境」：『考古学と自然科学』第21号 p.13～p.15）に従い、「古奥東京湾」と呼称を統一した。
- (10) 東木龍七、1929、「地形と貝塚分布より見たる関東低地の舊海岸線」：『地理学評論』2-7～9
- (11) 江坂輝彌、1943、「南関東新石器時代貝塚より観たる沖積世に於ける海進・海退」：『古代文化』14-4など
- (12) 鈴木素行、1984、「縄文時代・前期—縄文時代前期貝塚の意味を考える」：古河市史編さん委員会原始古代部会編『古河市史資料第8集 古河市遺跡分布調査報告書』

- (13) 金山喜昭, 1987. 「墳の内遺跡の生業活動－特に漁業活動について－」: 野田市遺跡調査会編『千葉県野田市墳の内遺跡－第Ⅳ次発掘調査－』遺跡調査会報告 第5冊
- (14) 小杉正人, 金山喜昭, 張替いづみ, 樋泉岳二, 小池裕子, 1989. 前掲論文
- (15) 「関山式」期＝縄文時代前期前葉(6000B. P.), 「黒浜式」期＝縄文時代前期中葉(5500B. P.)にあたる(共に関東地方の土器編年による)。
- (16) 前田潮, 1984. 「一の谷遺跡をめぐる諸問題」: 『千葉県松戸市一の谷西貝塚発掘調査報告書』一の谷遺跡調査会 p. 107
- (17) 打越遺跡・幸田貝塚では, 住居址内貝層下に多数の獣骨が集積される例が検出されており, いわゆる「送り場」儀礼との関連が指摘されている。
- (18) 田澤金梧, 1935. 「貝塚」: 『ドルメン』4-6
- (19) 酒詰仲男, 1951. 「地形上より見たる貝塚－殊に関東地方の貝塚について－」: 『考古学雑誌』第37巻1号
- (20) 初出は, 後藤和民, 1973. 「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」: 『房総地方史の研究』(他に, 後藤, 1978, 1979, 1980, 1982, 1985. がある。)
- (21) 関根孝夫, 1985. 「貝塚覚書」: 『日本史の黎明 八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』
- (22) 小池裕子, 1973. 「貝類の研究法－貝類採集の季節性について」: 『考古学ジャーナル』80
- (23) 小池裕子, 1979. 「関東地方の貝塚遺跡における貝類採集の季節性と貝層の堆積速度」: 『第四紀研究』17(4)
- (24) 赤澤威, 1988. 「縄文人の生業－その生態的類型と季節的展開」: 佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生－縄文農耕論へのアプローチ』日本放送出版協会
- (25) 鈴木素行, 1984. 前掲論文
- (26) 古河市史編さん委員会原始古代部会, 1984. 『古河市史資料第8集 古河市遺跡分布調査報告書』
- (27) 鈴木素行, 1984. 前掲論文
- (28) 設楽博己, 1987. 「縄文時代の諸問題」: 『千葉県松戸市殿平賀向山遺跡』松戸市教育委員会 p. 99など
- (29) 全国の貝塚について, その分布と構成貝種をまとめたものとして, 酒詰仲男の業績があるが, 松島義章によれば, 酒詰の記録に見られる貝塚の貝類組成は, 貝塚の形成れた地理的な位置と, その付近の貝類群集の分布とよく対応しているという。(酒詰仲男, 1959. 『日本貝塚地名表』, 1961. 『日本縄文石器時代食料総説』, 松島義章, 1984. 「縄文貝塚の貝類の生態－縄文海進にともなう浅海域の貝類群集を中心として」: 『歴史公論』第10号6巻 p. 83～p. 84)
- (30) 梅沢太久夫, 1987. 「縄文時代前期における一つの画期－関山期と黒浜期の間－」: 『埼玉の考古学 柳田敏治先生還暦記念論文集』新人物往来社
- (31) 西川宏, 1986. 前掲論文
- (32) 安井俊夫, 1987. 「原始古代史の実践－反省の記録」: 『歴史地理教育』409号
- (33) 小森ケン子, 1985. 『ぼく馬高縄文人になっちゃった』: めぐみ工房
- (34) 鹿田雄三, 1987. 「考古資料による地域史学習」: 『歴史地理教育』409号

〔付記〕

本稿は、筑波大学大学院教育研究科平成2年度修士論文の内容を要約したものである。論文の主旨からすれば、自然環境や、植物採集活動の復原等も含めた生業活動全体の中で貝塚形成の意義を論ずるべきだが、紙数の関係上大幅に割愛せざるを得なかった。同じ理由で、引用させていただいた報告書の目録をも省略することをお許しいただきたい。

尚、筑波大学歴史人類学系の前田潮助教授、ならびに社会科教育コースの諸先生方には常に指導と助言をいただきました。ここで改めて、感謝の意を表させていただきます。